

プライバシーを中核価値の発現として基礎付けることはできるか(氷川)

【論文紹介】

プライバシーを中核価値の発現として 基礎付けることはできるか

氷川雅則

コンピューター・テクノロジーによって記録・保存活動は、大きく変化させられた。第一に、情報収集の規模が変わり、第二に、収集される情報の種類が変わった。第三に、情報の交換の規模がけた違いに変化した(Johnson, 2001, p. 113)。このような変化の中でプライバシーの持つ意味は格段に大きくなっているが、プライバシーは非常につかみ所がない概念でもある。一方では、プライバシーは大きな重要性を持っており不可欠で守るべきものであるというのは当然であると考えられているが、他方では、プライバシーは個人の好みの問題であり、文化に相対的で一般的に正当化するのが難しいものである(Moor, 1997, p. 28)。プライバシーは主要な価値の一つなのだろうか。どのようにして私たちはプライバシーの重要性を正当化したり、基礎付けたりできるのだろうか。

コンピューター倫理学の先駆者である J. ムーアは、従来の内在的価値／道具的価値の枠組みの代わりに、中核価値／(中核価値の)発現という枠組みを用いてプライバシーの基礎付けを行おうとしている。ここでは、彼の「情報時代のプライバシーの理論に向けて(Moor, 1997)」、「コンピューター倫理学における理性、相対性と責任(Moor, 1998)」を中心に、彼が批判している D. ジョンソンや J. レイチェルズの議論も参照しながら、中心価値／発現という枠組みが従来の伝統的な倫理学における分析で用いられてきた内在的価値／道具的価値よりも有効であるかどうかについて検討する。

道具的価値と内在的価値

「情報時代のプライバシーの理論に向けて(Moor, 1997)」の中で、ムーアはまずプライバシーを正当化するための二つの方法を論じ、それら二つのアプローチの限界について述べる。そののち、彼が擁護可能であると考えるプライバシ

プライバシーを中核価値の発現として基礎付けることはできるか(冰川)

一の重要性を正当化する別の方法を提示する。プライバシーを正当化するための二つの方法とは道具的価値と内在的価値である。道具的価値とは、何か他の善いものへとつながるゆえに善い価値であり、内在的価値とはそれ自体として善いという価値である。道具的価値は手段として善いのであり、内在的価値は目的として善いものである(Moor, 1997, p. 28)。コンピューターは論文を書いたり、電子メールを送ったり、税金を計算したりするのを手伝ってくれる手段として善い。それゆえ、コンピューターは道具的価値を持っている。しかしながら、コンピューターを用いて得られる喜びはそれ自体として善い。喜びは何か価値を持ったものへとつながっている必要はない。そして、アリストテレス以来の哲学者が指摘したように、いくつかの事物——例えば健康——は道具的価値と内在的価値の両方を持っている。道具的と内在的価値の間のこのよく知られた哲学的な区別によってプライバシーを正当化しようとする二つの一般的な方法が出てくる(Moor, 1997, p. 28)

プライバシーは道具的価値を持つ

ほとんどの人は、プライバシーが道具的な価値を持つということには同意するだろう。これは最もありふれた正当化の方法である。プライバシーは危害に対しての保護を私たちに提供する。例えば、ある人の医療状況が公に知られたとするとその人が差別にあうリスクを負うというような場合がある。ある人にH I Vテストを行った結果が陽性であった場合、雇用主は彼を雇いたがらないかもしれないし、保険会社は彼と保険契約を結びたがらないかもしれない。この種の例はよく知られており、プライバシーが道具的価値を持つことについて説得力のあるケースを作る例には事欠かない。しかし、これは例えば爪楊枝などについても言えることであり、プライバシーが高次の道具的価値を持っていることを正当化するためには、ただ道具的価値を持つことを示すだけではなく、何か非常に重要なものへとつながるようなものであることを私たちは示す必要がある(Moor, 1997, p. 28)。

このような試みのうち最もよく知られているのはレイチェルズによってなされたものである(Moor, 1997, p. 28)。レイチェルズによれば、プライバシーが価値を持つのは、プライバシーが他の人々と様々な関係を結ぶことを可

プライバシーを中核価値の発現として基礎付けることはできるか(氷川)

能にするからである。プライバシーによって、私たちは公の場では不可能な親密な絆を結ぶことができる(Rachels, 1975, p. 323)¹。しかし、他の人と異なった関係を持つことの必要性はプライバシーを確実に基礎付けることはできない。というのも、すべての人が多様な関係を形成したいと思っているとは限らないかもしれないからであり、そうしたいと思っている人であっても、プライバシーを必要としないかもしれないからである。というのも、他人にどのように思われているかまったく気にしない人もいるからである(Moor, 1997, p. 28)。

プライバシーは内在的価値を持つか

もし、プライバシーに内在的価値があることを示すことができれば、プライバシーの正当化はもっと確固としたものとなるだろう。D. ジョンソンはそのための巧みな方法を提案している(Moor, 1997, p. 28)。ジョンソンは、私たちはプライバシーを自律の本質的な側面としてみるべきだと言う。それゆえ、自律が内在的に価値があり、プライバシーが自律の必要条件であるとする、私たちはプライバシーが内在的善の必要条件であるという強力な魅力的な主張を手に入れる(Johnson, 2001, p. 121)²。しかし、自律がプライバシー抜きには考えることができないというのは本当だろうか。

ムーアは電子的盗聴マニアのトムの例を挙げる。

トムはコンピューターと電子機器に精通しており、あなたのことを、あなたのすべてを知りたいという趣味を持っている。トムはコンピューターを使って、あなたの知らないうちに、あなたのこれまでの金銭上の記録、医療上の記録、犯罪歴を調べている。トムはあなたの生活に魅了されているので、隠しカメラを仕込んであなたの一举手一投足を記録している。あなたはこのことについて何も知らないが、トムはあなたを見るのを本当に楽しんでおり、特にインスタントリプレイを好んでいる。トムにとってあなたの生活を見ることはメロドラマを見るのと同じである。そのメロドラマの名前は「あなたの人生の日々」である(Moor, 1989, p. 62)。

プライバシーを中核価値の発現として基礎付けることはできるか(冰川)

私たちの多くは、トム覗きには何か嫌悪感を引き起こすものがあるということに同意するだろう。それは何だろうか。トムはあなたを傷つけてはいない。この情報のわずかでもあなたを傷つけるために用いてもいない。彼は他の誰かに情報を分け与えることもしていないし、あなたに対してこの情報を利用して何かをするなどということもまったくない。さらにあなたは完全な自律を有しているが、プライバシーはまったくない。このようにプライバシーは自律の本質的な条件ではないことになりプライバシー抜きの自律というものを考えることは可能である(Moor, 1997, p. 29)³。

中核価値とその発現

それでは私たちはどのようにしてプライバシーを正当化できるのか？どのようにして基礎付けられるのか。ムーアはプライバシーの正当化を中核価値という概念を用いることによってなそうとする。ムーアによるとすべてではないにしても多くの人間によって共有されている一組の中核価値があるという(Moor, 1998, p. 33)。それらは私たちみんなに馴染み深いものであり、生命と幸福はそのような価値のうちもっとも明らかなものの二つである。非常に控えめに言っても、人々は死と苦しみを避けたいと思うであろう。もちろん、ある状況では人々は自分の生命をあきらめたり、ある目的を達成するために苦痛を受け入れたりする。しかし、一般的には、人々は理由なく自分自身を傷つけたり自殺したりはしない。生命と幸福には人間にとって明らかな価値がある。人間にとってのその他の中核価値（あるいは中核善）には、能力、自由、知識、富、保護などがある。これらの価値は、異なった文化において異なった方法で表現(articulate)されるが、すべての文化がある程度はこれらの価値に重要性を認めている。これらの善が構成員の間で不平等に分配されている文化もあるかもしれないが、これらの価値を完全に疎んじている文化がないことは明らかである。人間には養育が必要であるし、文化が存続するためには若者を育てることが必要とされる。この種の活動には、少なくともいくつかの能力、自由、知識、富(resources)と保護が必要である。人間がいくつかの中核価値を共有しているという事実は驚くべきことではない。これらの価値は、いくつかの進化論的な優位をもたらす。中核善を完全に無

プライバシーを中核価値の発現として基礎付けることはできるか(氷川)

視した個人や文化はあまり長い期間存在しないだろう(Moor, 1998, p. 33)。

ムーアの言う中核価値とはこのようなものであるが、それではプライバシーは中核価値に含まれるのだろうか。ムーアによると、プライバシーそれ自体は中核価値ではないが、プライバシーは中核価値の発現(expression)、すなわちセキュリティという価値の発現であると言う。何らかの保護なしには種や文化は生き延びたり繁栄したりすることはない。すべての文化は何らかのセキュリティを必要としているが、同様にすべての文化がプライバシーを必要としているわけではない。社会が巨大になり、高度に双方向的になり、一方で親密さが失われるにつれて、プライバシーはセキュリティの必要性についての自然な発現となる。私たちは、私たち自身のものとは対立するような目標を持った他者からの保護を求める。特に、巨大で高度にコンピューター化された文化においては、多くの個人情報にオイルが塗られ、プライバシーがセキュリティという中核価値の発現として現れるということはほとんど不可避である(Moor, 1997, p. 29)⁴。

プライバシーが道具的・内在的価値であるかどうかについてムーアは再び次のように論じる。プライバシーはすべての中核価値を支えるという点で道具的であるので、重要な問題に対して道具的であると言え、また高度にコンピューター化された文化を支えるのに必要な方法であるので、プライバシーは私たちの社会にとって道具的価値としてきちんと基礎付けられていると言える。さらに、プライバシーはセキュリティという中核価値の発現であるので、人口密度の高い、コンピューター化された社会の状況においては内在的な善のもっともな候補である。電子盗聴マニアのトムは、覗きをしているときに被害者を傷つけてはいないにもかかわらず、内在的に悪いことをしているように思われる。被害者のセキュリティは、他の危害が及んでいなかったとしても、トムによって侵害されているのである。人々は保護されるという基本的な権利を持っており、現代のコンピューター化された文化の観点から見ると、その権利にはプライバシー保護が含まれるのである(Moor, 1997, p. 29)。

このようにムーアは中核価値の枠組みを用いてプライバシーを道具的にも内在的にも基礎付けることができると論じている。道具的にはすべての中核価値を支えるものとして、内在的にはセキュリティの発現として。しかしな

プライバシーを中核価値の発現として基礎付けることはできるか(氷川)

がら、彼は道具的／内在的という理解の枠組みは誤りを導きやすいと言う。伝統的に、道具的／内在的分析は最高善といったものを探求する方へと私たちを突き動かし、私たちはすべてのほかのものを導くような一つのものを見つけようとするからである。これに対して、ムーアが主張する中核価値によるアプローチにおいては、ある価値が他の価値よりもより重要であるかもしれないが、最高善といったものはないと言う。なぜなら、モデルとなるのは相互に支えあった枠組みのようなものであるからである。中核価値はトラスの部材としてお互いに支えあっている⁵。中核価値や中核価値の発現が道具的であるか、内在的であるかを問うことは、トラスの部材が他を支えているのか他によって支えられているのかを問うのに似ているとムーアは言う。それは本質的に両方となっており、私たちすべてにとっての中核価値は相互に支えあっている。ある人々はある価値を他の価値よりも重要視する。運動選手は能力を、ビジネスマンは富を、兵士はセキュリティを、学者は知識を・・・というように。しかしながら、すべての人そしてすべての文化が存続し、繁栄するのにすべての中核価値を必要としている。プライバシーはセキュリティの発現として、私たちのますますコンピューター化されていく文化における私たちの価値のシステムにおいて相互に組み合わさった重要な要素である(Moor, 1997, p. 30)。

プライバシーはセキュリティの発現であるか

以上のようにムーアはプライバシーを中核価値とその発現という概念を持ち込むことによって基礎付けようとしたのであるが、それは成功したといえるだろうか。確かに、高度にコンピューター化された現代の社会においては、プライバシーの中でもとりわけセキュリティの占める重要性が非常に大きくなっているということを指摘した点でムーアの分析は意味があるだろう。しかしながら、プライバシーの概念に含まれる他の価値までもがセキュリティの発現とみなせるということにはならない。さらに発現とは何かということをもムーアは明確に示していない。彼の挙げた電子的盗聴マニアのトムの例では、プライバシーはセキュリティの一部としてしか描かれていない(Moor, 1989, p. 62)。また彼はセキュリティというものが何かということも明確に

プライバシーを中核価値の発現として基礎付けることはできるか(冰川)

は示していない。なぜ電子的盗聴マニアのトムがセキュリティを侵害していると言えるのだろうか。ジョンソンに対する批判で見たように、ムーアによればトムは自律を犯していないし、何らかの危害を加えているわけでもなかったのであるが、それにもかかわらずセキュリティは犯しているのであった。そのような場面で侵害されているセキュリティとは一体何だろうか。ここでは、ムーアは盗聴やコンピューターのクラッキングという現代の情報化社会におけるセキュリティの侵害という概念を無批判に用いているように見える。ムーアによればセキュリティというものはすべての文化に必ず見出せる中核価値として考えているが、そのようなセキュリティと現代の情報化社会におけるセキュリティというものは果たして同じ物なのだと言えるのだろうか。彼が言うように、プライバシーのまったくない文化を持った社会がありうるのだとすれば、そのような社会においては個人の私生活の盗聴はセキュリティの侵害にはならないだろう。

もし、セキュリティを現代の情報化社会におけるセキュリティという狭い意味でとるならば、それは個人のプライバシーを守るための道具的価値になっていることは明らかである。一方で、ある種のプライバシーを守ることが個人の安全という広い意味でのセキュリティを守ることへの道具的価値になっていることも明らかである。しかし、これはプライバシーやセキュリティといった重要な価値が比較不可能であることを意味しているわけではなく、むしろムーアがプライバシーやセキュリティといった概念を混乱して使っている可能性を示していると言える。それゆえ、概念をきちんと分析し明確にすることによって、どちらがどちらを支えているのかということを明らかにすることは必ずしも無理ではないと言える。

価値の比較と中核価値

また、現実の社会ではムーアの言うように様々な価値が相互に支えあって存在しており、どの価値がどの価値を支えているか、どの価値がどの価値より重要であるかを示すことは容易ではない(Moor, 1997, p. 30)。しかしながら、そのことは私たちが価値の比較をしないで済むということを示してはいない。例えば、表現の自由とプライバシーの権利はどちらが優先するのか、

プライバシーを中核価値の発現として基礎付けることはできるか(氷川)

社会のセキュリティと個人のプライバシーはどちらが重要であるのかというようなことについて私たちは常に価値の比較をしなければならないし、むしろこのような価値の秩序の考察、さらにいえば構築こそが倫理学の仕事であるとさえ言えるかもしれない。そして、そのような考察においてはムーアが提案した中核価値とその発現という図式よりも、内在的価値と道具的価値という図式の方が役に立つように思われる。

内在的／道具的価値の図式の問題点は、ムーアが指摘したようにそのような図式を用いることによって私たちは最高善を求めてしまうということにあるが、内在的価値を中核価値に置き換えることによって最高善の問題が解消するとは言えないだろう(Moor, 1997, p. 30)。ムーアは中核価値を述べるときにすべての個人やすべての文化に必ずあるものとして中核価値を考え、その際に個人や文化の存続や存在というものを挙げているが、そうだとすれば、中核価値は存在という一つの価値に対しての道具的価値であるということになるだろう。その場合に、存在（あるいは存続）は内在的価値なのか、道具的価値なのか、あるいは中核価値なのかそのような問いが残ることになる。もし、中核価値／発現を説明するのに（明示的であれ、非明示的であれ）存在が内在的価値や道具的価値であることに訴えているとすれば、中核価値／発現という図式は、内在的／道具的価値という図式を脱していないことになる。

中核価値は最高善の問題を回避できるか

さらに、存在が中核価値であるとするならば、その際の中核価値とは何か、つまりなぜ存在が価値であるのかということを説明できない。ここには内在的価値における最高善の問題と同じ種類の問題が残る。そもそも幸福こそが内在的価値であり（この場合に他の価値は幸福に対する道具的価値になるだろう）、最大多数の最大幸福が最高善であるとして何が問題であるのかということをムーアは述べていない⁶。中核価値／発現という枠組みが有効であることを示すためには、少なくとも幸福が内在的価値であるとするだけでは不十分で、それに加えて最高善というものを導入しなければ、内在的／道具的価値の枠組みは不十分であるということをムーアは示さなければなら

プライバシーを中核価値の発現として基礎付けることはできるか(氷川)

ない。それがなされない限り、中核価値／発現という枠組みは内在的／道具的価値の枠組みを越えるものではなく、プライバシーの基礎付けは内在的／道具的価値の枠組みによって行われるべきであるということになろう。

註

- ¹ レイチェルズは次のように言う。「私たちや私たちについての情報に誰がアクセスするかをコントロールする能力と、他者と異なった種類の社会的関係を作り維持する能力との間には密接な関係があるという考えに基づいてプライバシーの価値についての説明をここでしたい。この説明によると、プライバシーは、自分が持ちたいと思う、他者との様々な社会的関係を維持していくために必要であり、そしてそれゆえプライバシーは私たちにとって重要なのである。「社会的関係」という言葉で、私は特別に通常とは異なる何かあるいは専門的な何かを言おうとしているのではない。単に、友人、夫婦、一方が他方の雇用主であるといった、二人の人間について言うときに通常心に思い浮かべるもののことを言っているのである(Rachels, 1975, p. 326)。」

確かに、プライバシーがそのような関係を成り立たせる重要な要因の一つであるということに間違いはないが、そのような関係を保つ道具的価値としてプライバシーが重要だということは明白ではない。むしろ、プライバシーを守るためにそのような関係が重要であるという考え方もできる。私たちは医者と患者という関係を成立させるために医療に必要な情報以外の私的な情報を医者には知らせないのではなく、私的な情報を守るために医者と患者という関係を明確にするとも言える。

- ² ジョンソン自身は、プライバシーを単に個人の善としてだけではなく、社会の善として捉える(Johnson, 2001, p. 121)。ジョンソンは、民主主義について「市民が、自律能力を行使し、その中でそれまでは誰も思いつかないことを行い、また批判的になる能力を発達させる自由を持っているという思想である(Johnson, 2001, p. 126)」と述べている。
- ³ ムーア自身はプライバシーに内在的価値を認めていると言う。「しかしながら、私を含めてプライバシーを単に道具的に価値があるものとしてではなく内在的価値があるものとして考える人がいることに私も同意する(Moor, 1997, p. 29)」。
- ⁴ ここでは“grease”を「オイルを塗る」と訳した。ムーアはよく“greased data”

プライバシーを中核価値の発現として基礎付けることはできるか(氷川)

という表現を使っており、この場合の“grease”が何を表しているのかという点に関して、Tavani (2004)にある次のような記述が参考になる。「BBCテレビシリーズ『世界を変えた機械(1990)』のために行われたあるインタビューにおいて、ハーバードの法学教授アーサー・ミラーは次のような指摘を行った。そのような情報を集めようとするのはオイルの塗られた豚(greased pig)を追いかけることに似ている。豚に手をかけることはできるが、しっかりと豚を手の中に捕らえて逃さないようにするという事は非常に困難である(Tavani, 2004, 118)。」

- ⁵ トラスとは鉄橋や塔に使われている三角形を組み合わせた構造のことである。
- ⁶ 最大多数の最大幸福というときにどうやって他人の異なった価値を量るのかという反論をする人がいるが、これはあまり有意義な反論とは言えない。他人の異なった価値を量ることは最大多数の最大幸福の問題に限ったことではなく、人々の価値同士がぶつかったとき、あるいは同じ人の内部でも価値がぶつかったときには価値同士の比較というものは必要であり、実際に私たちの社会が合理的である限りにおいて比較はなされているし、個人においても合理的に生きている限りにおいては比較を行っている。

参考文献

- Johnson, Deborah G. (2001), *Computer Ethics*. 3rd ed. Englewood Cliffs: Prentice-Hall. (D. G. ジョンソン (水谷雅彦・江口聡監訳) 『コンピュータ倫理学』 オーム社, 2002)
- Moor, James H. (1985) 'What Is Computer Ethics?' *Metaphilosophy*, Vol.16, No.4: 266-275.
- Moor, James H. (1989) 'How to Invade and Protect Privacy with Computers.' *The Information Web*. Ed. Carol C. Gould. Boulder: Westview Press, 1989: 57-70
- Moor, James H. (1997) 'Towards a Theory of Privacy in the Information Age.' *Computers and Society*, 27:3 (September 1997): 27-32.
- Moor, James H. (1998) 'Reason, Relativity, and Responsibility in Computer Ethics.' *Computers and Society*, 28:1 (March 1998): 14-21. Reprinted in Bynum, Terrell Ward, and Simon Rogerson. *Computer Ethics and Professional Responsibility: Introductory Text and Readings*. Oxford: Blackwell, 2004:

プライバシーを中核価値の発現として基礎付けることはできるか(氷川)

21-38.

Rachels, James (1975) 'Why is Privacy Important?' *Philosophy and Public Affairs* 4. Summer: 323-333.

Tavani, H. (2004) *Ethics and Technology: Ethical Issues in an Age of Information and Communication Technology*. Hoboken: John Wiley & Sons.

また、参考文献の選定において日本学術振興会未来開拓学術研究推進事業電子社会システム「情報倫理の構築」プロジェクト編『情報倫理学研究資料集 I～IV』に所収の論文紹介が非常に参考になった。